

不知火海の漁業

表1 不知火海の漁法

漁法名	漁法	船の数・乗組員数	総人員	漁期	魚種
地引網類 地引網	<p>小高い丘の上や木の上から魚の群れ(あかみ)を見つけ、陸で待機する人たちに知らせ、網舟が魚群を取り囲み、曳網を延ばして船を岸に付け、その網を陸から引き揚げてとる。1日に何回も網を入れることもあれば、イワシがいないときは1回も入れないときもある。11月頃は夜獲れる。</p> <p>網子には1網毎に取れ高によってイワシを分ける。それを自宅で湯がき乾燥(むしろ)させイリコを商人に売る。地曳網用の網を海上でひきまわす漁法のことを「沖繰り網(チュウドリアミ)」という。</p>	<p>5隻 網船：2隻 2～3名 脇船：2隻 2～3名 手船：1隻 2名</p> <p>※各船団の漁網・船舶規模により乗組員数・櫓数などに若干の相違がある。</p>	<p>乗組員：8～10 網子：20～30 乗組員一同上陸して曳網を引く。 なお、乗組員以外の男女、老幼も協力するから曳子の数は一定しない。</p>	3～5月、11～12月	白子(カタクチイワシの稚魚)
まき網類 縫切網 (八田網)	<p>通称「八田網」。海に大風呂敷を広げるように網を広げ、8カ所の曳き手で引き上げることからそう呼ばれていた。縫切網は八田網が進歩したものといわれる。巾着網が導入される前までは、盛んに行われていた。漁法は、夕刻出港し、火船が集魚灯で魚群を集結させ網に誘導する。両網船は舳をとき、口船に曳網を渡し左右に分かれて施網にかかる。網は次第に引き上げられて小さくなり魚群は次第に捕獲部に集まる。</p>	<p>網船：2隻 8～10名 口船：2隻 3～4名 火船：2隻 2～4名 曳船：1隻 動力6馬力</p> <p>※網船は網を積み、口船は漁獲物を載せる。曳船が各船を漁場まで曳航する。</p>	14～19名	周年 集魚灯の効果が下がる月夜は休漁。	カタクチイワシ タチウオ ズキ
まき網類 巾着網	<p>巾着網には2通りの漁法がある。また操業には、日中型と夜間型がある。魚群発見の方法が違うだけである。</p> <p>①片手巾着網 天草郡牛深や御所浦が主根拠地。東シナ海で、マイワシ、アジ、サバを主目的とする。</p>	<p>①片手巾着 本船(網船)：1隻 24～28名 母船：1隻10名 火船：2隻5名 ×2</p>	28～40名	周年 集魚灯の効果が下がる月夜は休漁。	カタクチイワシ

まき網類 巾着網	<p>②双手巾着網 御所浦、芦北方面が主根拠地。カタクチイワシを主目的とする。2艘の網船がもやいを解いて、口船の力を借りて左右に分かれ双方から魚群を取り囲み底をしぼって魚群を丸ごと獲る方法。網を引き揚げるのは、人力または「カグラサン」(巻き取り用ロクロ)を使用する。</p>	<p>②双手巾着網 網船：2隻 17名×2 無動力と動力がある。動力は焼き玉2馬力。 火船：2隻 3～5名 ヤンマーディーゼル4～5馬力。口船：2隻 5～6名</p>			
船曳網類 手繰網	<p>「島手グリ」とも呼ばれる。地曳網が進化した漁法。一般に手繰網というのは人力で曳網するものを指す。船を流しながら曳くものは、潮打瀬、流し手繰等と称される。 沖の方に身網(魚だまりの袋)をつけて1～2隻の船で沖の方から網を入れて、海岸につけて錨で船を固定して網を曳く漁法。網を曳く場所は、岩場と岩場の間の海底。期間の短い他の仕事の暇をみて操業していた。</p>	<p>1～2隻 1～2トン</p>	2～4名	5～7月	エビ及び 雑漁
船曳網類 五智網 (トントコ網)	<p>地方名で「トントコ網」とも称する。早朝出港する。漁法は、1隻の舟で岩場の多い場所で一方に「オドシ」と呼ばれる浮きをつけ、網の先に10尋(15m)位の網をつけ、網には「プイ」というわらを曲げたものを2尋おきくらいにつけたのを、ここと思われる漁場をぐるりと廻してきて最初に入れた浮きをとり、底帆(そこぼ)＝錨を入れて潮の抵抗で徐々に舟が身網のほうに動いていくようにして、網を引きながら舟べりをトントコ叩いて魚を網の中に追い込む漁法。この網の特徴は、船を停止しないで曳網する点にある。</p>	<p>1隻 30～35尺 着火5～6馬力 ※動力船を使用する場合、漁場の往復と網を打廻す時のみに動力を使用する。</p>	1～2名	周年 主漁期は春秋2期である。 4～6月 9～10月	タイ：3～7月中旬 エビ：6～8月 アジ：6～7月 イカ：9～10月 タチウオ：12～4月 トラフグ：4～6月初

船曳網類 打瀬網	<p>2通りの漁法がある。</p> <p>①帆打瀬網 風力と潮流を舷側にうけ船を横に流しながら曳網する。別名を「流れ網」「横流れ」という。熊本県の帆打瀬網は「備前打瀬」といわれる特殊な方式。不知火海では芦北の佐敷町が主根拠地。昼間と夜間操業があるが夜間操業が主である。</p> <p>②潮打瀬網 底帆を用いて潮流を利用する。イカを目的とするため「イカ打瀬」ともいう。天草郡上村方面が主根拠地。</p>	<p>①帆打瀬網 1隻 3～5名</p> <p>②潮打瀬網 1～2隻 各2～3名 ※漁場の往復には動力を利用するが操業中は利用しない。</p>	<p>①帆打瀬網 3～5名</p> <p>②潮打瀬網 2～6名</p>	周年	<p>6月12日～8月： イシエビ、子エビ 9月11日～11月： クマエビ 12～4月頃まで： アカシタビラメ、ホシカレイ、カレイ、コチ、ヒラメ、クルマエビ、イカ</p>
その他の網類 打網	<p>主に冬場の漁。網を打つ人が船頭で、舟を漕ぐ人（トモデシ）は網を打つ人の指示で舟を安定させないと、打ち手が網を投げ入れた際に網と一緒に海に落ちることがよくあった。</p> <p>浮子がなく、沈子だけが付いた手網を円形に投下し、網裾を内側に吊って袋をつくり捕獲する漁法。網打ちで左腕が濡れるため、舟には「火どこ」という小さなかまど型をしたものを積んでいた。</p> <p>また、仕事の合間、潮の流れが速いときに休む（潮かがり）時は、船団がもやっていた。</p> <p>舟で寝るため、トマガヤや寝具などを積んでいた。昭和10年頃まで操業されていた。これに代わってカシ網が流行する。地曳網の合間の漁。</p>	<p>1隻2名 地域によっては、船団を組んで漁を行っていた。多いときは20隻以上あった。</p>	2名	周年 最盛期は旧暦の11月～2月	ボラ エビナ (ボラの子) シメ等

<p>延縄類 延縄</p>	<p>「ナエナワ」「ノベナワ」とも呼ばれる漁法。俗に「鉢」と呼ばれる桶に100本くらいの針をつける。4、5桶を海に投げ入れ2～3時間してから元のほうから揚げる漁法。シャクを餌に使う。魚種によって鉢の構成が若干異なる。手漕ぎ船であった頃は簡単な生活道具を船に乗せていた。場合によっては1カ月帰らない時もあった。</p>	<p>1隻</p>	<p>2～3名</p>	<p>周年 最盛期は 秋から冬</p>	<p>タイ チヌ ハモ ガラカブ</p>
<p>刺縄類 磯立(立)網 (磯刺網)</p>	<p>地方名で「カシ網」とも称される。夕刻、潮だるみ(潮の流れがとまったとき)をみて出漁し瀬に網を張り、翌朝同じく潮だるみを利用して揚網する。この網の特徴は、漁場が瀬の所に限られていることである。網は細長い带状で、沈子部は水底に達する底刺網で絹網または三重網になっているため漁獲量が高い。現在でも行われる漁。</p>	<p>1隻 18尺程度</p>	<p>2～3名</p>	<p>秋～春 盛漁は冬</p>	<p>チヌ タイ メバル カレイ</p>

注) 表中の「船曳網類」という表記は、手繰網、打瀬網、五智網、イワシ船曳網などを総称して「船曳網」というため、「熊本県の海面漁業」の表記通りに表記したものである。

(出典) 農林省熊本統計調査事務所『熊本県の海面漁業』1954年
御所浦町『御所浦町誌』2005年
岩本廣喜『歩み』1971年(推定)

表1の漁を、いつ、どのくらいの期間、何を狙って、どんな漁具で行うのかという点に絞ってまとめ直すと次の表のようになる。

表2 不知火海における漁具別漁期別主要漁獲物

漁具	網名	許可及び 免許権数	許可漁期 (月)	主漁期 (月)	主要漁獲物
まき網	双手巾着網	14	1～12	2～10	カタクチイワシ、タチ、マアジ、サバ類
	縫切網		5～7		カタクチ、キビナゴ、マアジ、タチ
	大網	2	12～4		ボラ
小型機船 底引網	打瀬第2種	80	1～12	4～12	クルマエビ、クマエビ、シラサ、ハモ、イカ
	打瀬第3種	89	1～12	4～12	同上
流刺網	エビ流	315	4～12		クルマエビ、クマエビ、シラサ
	コノシロ流	57	1～12	6～11	コノシロ、タイ、マアジ、タチ、ヒラ
	マナガタ流	2	1～5 10～12	2～5	マナガツオ、コノシロ、サワラ、ヒラ
	タイ流	10	3～9	3～6	タイ類
	サワラ流	38			サワラ
	ヒラ流	16			ヒラ、コノシロ
地引網			1～12	3～10	カタクチ、コノシロ、キビナゴ
磯刺網			1～12	3～10	イサキ、メジナ、メバル、タイ類
一本釣			1～12		タチ、コチ、カレイ、イカ、スズキ、タイ類
ボラ餌付			1～12	9～10	ボラ
はえなわ			1～12		タチ、ハモ、タイ類、カレイ、スズキ
イワシ船曳網			1～12	3～10	カタクチ、タチ、コチ
桁網			1～12		アイゴ、コノシロ

アジ流		1～12		マアジ、ヒラ、マナガツオ、コノシロ
吾智網	10	1～12	2～5、7～11	マダイ、チダイ
手繰網	8	1～12	4～11	チダイ、エソ、エビ類、カレイ類
も手繰網	19	1～12		同上
刺網	19			ウシノシタ類
タコつぼ	10	3～10	5～8	タコ
イカかご	14	12～5	1～5	コウイカ、シリヤケイカ
ゲンシキ網	27			
罟刺網	84	8～12		ボラ、コノシロ
共同漁業	第1種	2		アオノリ
	第3種	29		つきいそ
	その他	13		
区画漁業	オゴノリ養殖	2		
	ノリヒビ建	38		
	カキ	8		
	クルマエビ	8		
	カニ	2		
	貝類	23		
その他				竹羽瀬、アンコウ類、その他

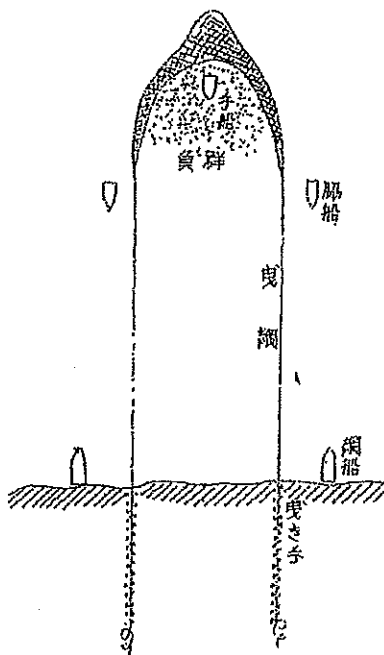
注) 許可及び免許件数は1961年1月1日現在、熊本県分のみ数。

(出典) 西海区水産研究所「水俣病における水産の調査研究」1961年

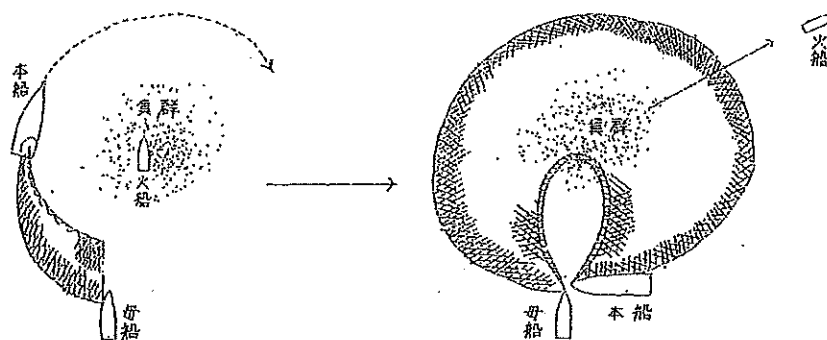
不知火海漁業図

漁業の説明だけではイメージが付きにくいいため本稿で取りあげた漁業を図示した。

地曳き網

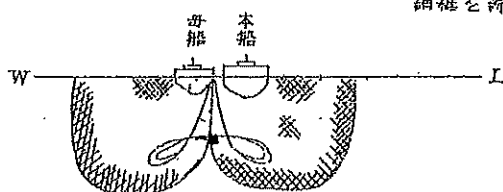


片手巾着網

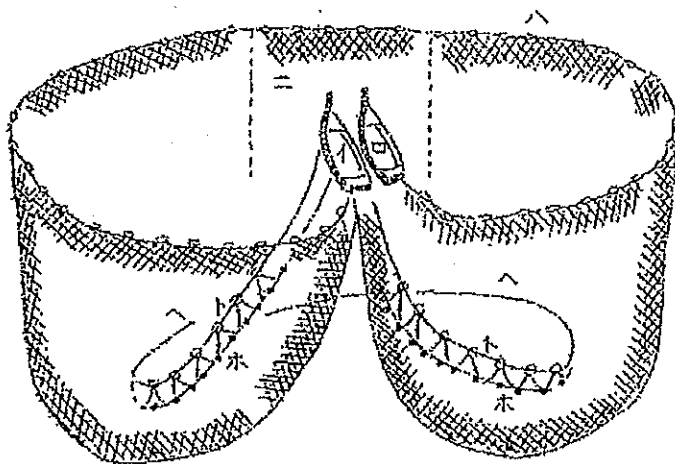
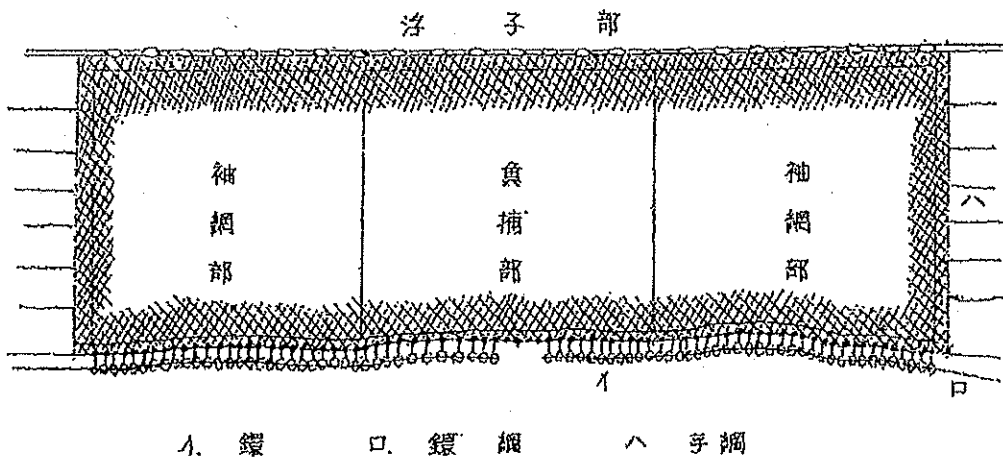


網の一端を母船に渡し本船は全速力で石舷を使用して錠網にかかる。

本船が錠網を終つて母船と相揃うに至れば直ちに網裾を締めくくる。

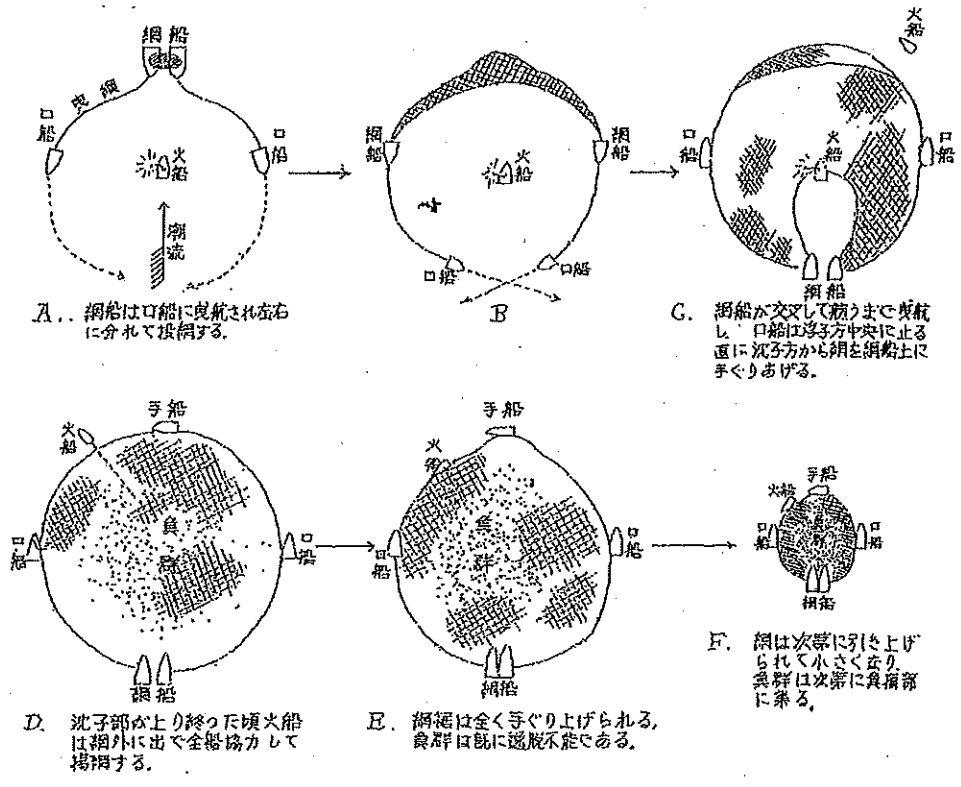


双手巾着網

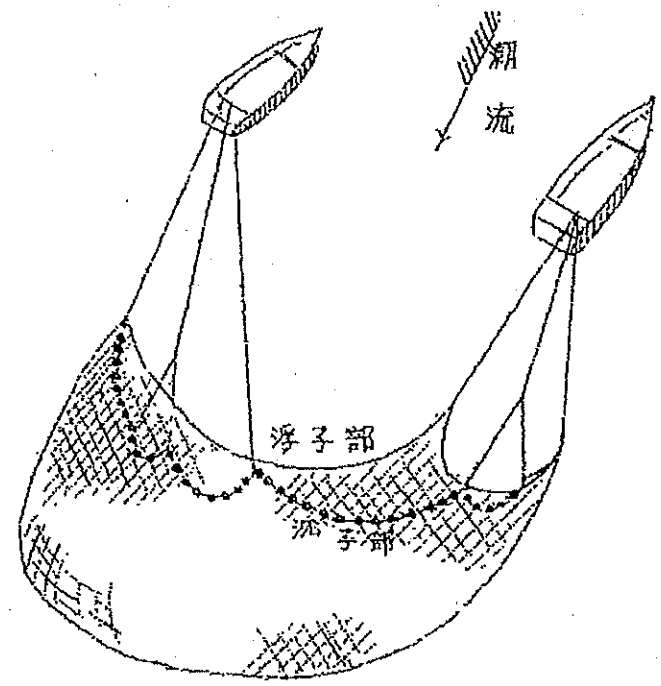


- 1. 鍔網
- ロ. さか網
- ハ. 浮子及浮子網
- ニ. 魚捕部
- ホ. 沈子及沈子網
- ヘ. 小き出し部
- ト. 締綱（鍔綱）

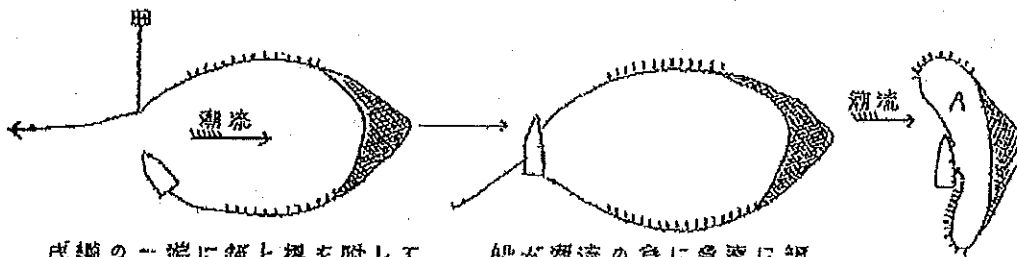
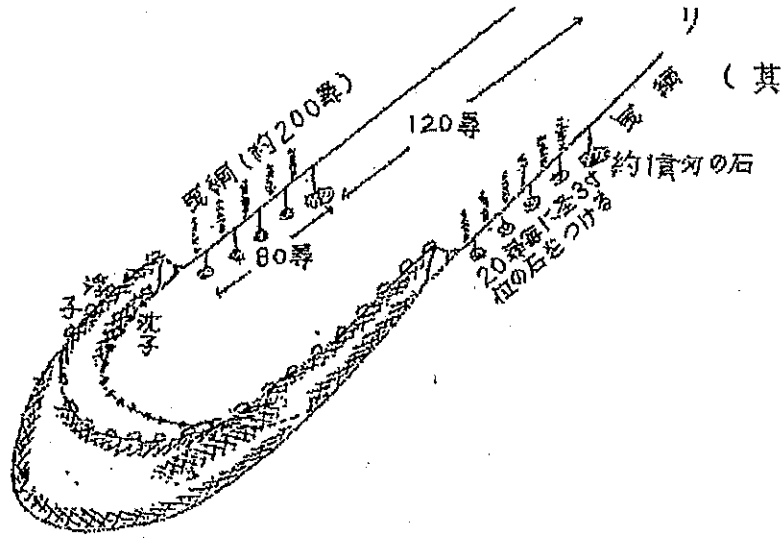
縫切網



八田網



五智網



五智網の一端に鉛と樽を附して潮下に向つて投網し元の位置に帰り鉛と樽を引きあげる。

船が潮流の爲に急速に網に流れつかぬ様 (A図) 鉛を投じて海底を引まがらせ乍ら網を曳寄せ。

網が無いと此の様に船が直に網に突着する。

(出典) 農林省熊本統計調査事務所「熊本縣の海面漁業」1954年、p59、p62、p65、p67、pp.109~110